



発行・カトリック水巻教会
 編集・広報委員会
 遠賀郡水巻町頃末南1丁目35-3
 〒807-0021
 TEL 093(201)0680 FAX(201)7354
 第291号

信じることと、勉強すること 広報・岩本

ある日、外国人を支援する NGO の人たちの会議でキリスト教の復活祭についての話になりました。この時、来年のことについての話になり、キリスト教の人たちの日程を考える時、春は復活祭があるからという話になりました。教会に関係の無い人でもクリスマスが毎年12月25日であること、キリストが復活したことくらいまでは知っています。

彼らからするとクリスマスと同じように、復活祭も固定していると思っていたようですが、毎年日程が変わるキリスト教の暦について説明すると全員がびっくりしていました。

その時に話したブラジルのリオデジャネイロのカーニバルは四旬節直前にあるという話には驚いていました。

私たちは、信徒として神を信じ、キリストの教えを守り、聖書を読んで祈り信仰生活を送っていますが、それだけで十分でしょうか。聖書を読んでも結構分からないことが多いし、どうしてそうなのかと思うことはありませんか。信じることは一番大切ですが、その信仰と真理を深めるためにはいろいろな知識も必要です。

例えば聖地巡礼に行くと、イエス様がいた場所で祈ることができるという素晴らしい体験が出来るだけでしょうか。イエス

様がどのようなところを歩かれたのかを見ること、どんな気候の場所だったのか、ペテロはどのようなところで漁をしていたのかなどを知ることも信仰を深めるためにとても貴重な体験になります。

カトリック教会では全世界で同じ日に同じ箇所が読まれています。このことを知っているだけで外国のミサにも参加できます。友人のプロテスタントの牧師にこの話をすると、本当にびっくりしていました。

教会のことを信者以外の人に聞かれたとき、どのような説明をしますか。勉強することは福音宣教に直接つながります。ある司祭は福音宣教についてこう書いていました。「福音宣教は信徒がするものです」

皆さんはキリスト教について友人に聞かれて答えることが出来ますか。信仰を深めるために勉強をすることはとても大切なことです。水巻教会の図書室にもいい本がたくさんあります。

今、モーセの十戒を読み直す・聖書・2面
 子ども達のページ・・・・・・・・・・3面
 心の健康セミナー・・・・・・・・・・4・5面
 教会学校のページ・・・・・・・・・・6・7面
 今月の聖人・・・・・・・・・・7面
 おしらせ・・・・・・・・・・8面

「今、モーセの十戒を読み直す」No.15

さいたま教区長 谷 大二司教

まとめ②

モーセの十戒は、解放された民が新しいところへ行って共同体を作る、その共同体を作ったときに全く同じピラミッドのシステムを作ってはいけないという共同体のビジョン、方向性を神様が示してくださったのです。

だけど何度も何度も同じことを繰り返してピラミッドを作ってきた訳です。ダビデもそうだし、ソロモンもそうだった。中世の教会もそうだったし産業革命以降も、今もそうかもしれない。もう一度モーセの十戒に戻って、私たちは共同体に備えていかなければならないような気がします。この抑圧のピラミッド・システムに再びはまってしまわないような共同体作り、その指針がモーセの十戒だったという風に言えると思います。

そしてイエス様はこのモーセの十戒を、いろんな形で完成させて私たちに福音としてメッセージしてくださったのではないかと思います。モーセの十戒が現代社会の中で生かされているとは、とても思えませんけれども、今の社会の中の現状というのを見ながら私たちの共同体作りをどうして行ったらいいのか、考える必要があります。今の時代のいろんなことをもう一度並べてみました。エジプトにいた時代のイスラエルの民と全く同じ状況だという風に言えると思います。形は違い国も違います。しかし同じことが今でも起こっています。

これで話は終わりますけれど、去年から今年にかけて、派遣切りとか不況の時代の中で私たちの回りで苦しんでいる労働者たちがたくさんいます。彼ら自身が立ち上がっていく指針として、このモーセの十戒があるのではないかという気がいたしました。(おわり)



聖書への案内 No.20 エゼキエル書

大預言書の第三巻で、エレミヤ書の次に置かれています。

エゼキエルは祭司の子として生まれ、祭司であり預言者でした。

前 597 年に捕囚としてバビロンに連れて行かれましたが、捕囚になって5年目に預言者としての召命を受けます。(1章)

彼は祖国の都エルサレムが陥落するまでの神の審判の到来を告げます。その後、捕囚民の中で遠く将来へのことに触れていきます。

全体は三つに構成されています。

A、エルサレム陥落以前の預言(1章～24章)

・エゼキエルの召命(1章～3章) ・ユダとエルサレムに対する審判の預言(4章～24章)

B、周辺諸国に対する託宣(25章～32章)

C、エルサレム陥落後の預言(33章～48章)

・復興の預言(33章～39章) ・新しいエルサレムの預言(40章～48章)



子どもたちへのページ
 しんやくせいしょ し とげんこうろく
 新約聖書・・・使徒言行録 No.2

ステファノの事件のあとイエス様の弟子たちは、いろいろな町に逃げて行きました。この頃、アンティオキアにいたバルナバという人がサウロを捜しにサウロの故郷タルソスに行き、サウロをアンティオキアに連れてきました。2人はここで多くの人に神の言葉を教えました。ここで弟子たちは初めてキリスト者と呼ばれるようになりました。(11章)キリスト教徒の誕生です。

その後、バルナバとサウロはキリストの教えを伝えるために旅に出ます。この時から、サウロはパウロと呼ばれるようになります。(13章9節)

サウロという名前はヘブライ語(ユダヤ人の言葉)ですが、ユダヤ人以外の人たちにもキリストの教えを伝えるようになってからは、ラテン語での読み方のパウロという名前が使われるようになりました。

キリスト教会は全世界にあります、同じ名前でも国によって読み方が違います。イエス・キリストも英語の国では、ジ

ーザイス・クライストと読みますし、スペイン語では、ヨハネはホアン、ヨゼフはホセ、パウロはパブロです。

使徒言行録で出てくる都市の名前は今もほとんど残っています。ペテロやパウロが訪れた時に大きかった町が今は小さくなっていたり、町が移転して遺跡だけになっていたりしているところもたくさんあります。

昔は港だったアンティオキアは、川が運んだ土によって海から離れた町になりました。かつてはエジプトの女王クレオパトラも船で着いたことが伝えられていますが、4回の大地震と港が遠くなったので小さな町になっています。それでもキリスト教徒誕生の町として、ペテロやパウロがいたときの遺跡は残っています。パウロの故郷タルソスにはパウロ家の井戸が残っています。パウロの旅は教会の会議室に大きな地図がありますので見てください。全部本当の話です。

心の健康セミナー「家族について考える 3」＝父と子

6月19日(日)小宮豊氏による「心の健康セミナー」に参加してきました。

小宮氏によれば、心の健康セミナーは、わたしたちが考えなければならないことを、精神医学と宗教の対話という形式をとりつつ、自分を見つめ、他者に聴き入り、分かち合う場です。以下に概要を記載します。(矢田 公美)

心理学的には「母と子」は二者関係、「父と子」は三者関係である。母は、子にとって生まれた時からの授乳／おむつの世話に象徴される快／不快を左右する万能感を与える奉仕者の存在である。母が「包摂(ほうせつ＝包み込む)」であるのに対して父は「切断＝内と外とを分つ」の役割を持つとされてきた。

父はまず、「このものたちにわたしは責任を負う」という家族宣言をすることによって自分の家族を他の家族から区分する。社会的父性の宣言という。

第二に父は正と邪を区切る。掟をしき、ルール(規範)を守ることを家族メンバーに指示するのは、父の仕事である。父は世の掟の体現者としてこの仕事を行うから家族という閉鎖空間に世の風を送り込むという役割を果たすことにもなる。

父の仕事の三番目は母子の癒着(ゆちゃく)を断つこと、親たちと子どもたちの間を明確に区切ることである。父を名乗る男は、妻と呼ばれる女を、何よりも、誰よりも大切にするとする形でこの仕事を果たし、子どもは父のこの仕事によって、母親という子宮に回帰する誘惑を断念できる。この仕事のもう一つの側面は、母という絶対者の価値を相対化するという意味を持つ。子どもに耽溺(たんでき)する母がその価値観を子どもに押し付けようとする時、別の価値観を提示することによって子どもを母の侵入から守るのは父の仕事である。

母と子の二者関係を平面的なものとする、これに父が入った三者関係は立体である。三次元の世界は光も影もある。わたしたちの存在する世界により近い知覚が、これによってもたらされる。

子どもたちは幼いとき平面的な絵を画く。年長になるとそれが立体的になってくる。子どもに影の存在を教え、より現実的に近い知覚を与えるもの、それが父親の存在の認識である。

ただしここで「父」、「母」といっているものは、親の役割の二つの要素のことで、父＝男、母＝女というわけではない。ひとりの母が「母」の役割を果たしながら、しっかりと「父」の仕事をしている場合もあろうし、家によっては、夫が「母」をやり、妻が「父」の仕事をこなしているであろう。

現代の(少子化時代の)子どもたちは親の人生設計に沿って生まれてくる。妊娠のタイミング、子どもの数、子どもの人生コースなどを慎重に測って人々は親になる。自らの人生を豊

かにし、成功に導くための子産みであり、子育てであるのだから親は子どもに期待した役割の遂行を求める。言葉に出さなくても、素振り、視線で求める。子どもは親の期待を読み取り、それに沿って生きようとする。すべての子どもがこれらの仕事をうまくこなしているわけではない。

子どもたちの事件は親の期待に添えない自分を自覚するようになって挫折し、自責感が反転して親への罵詈雑言や暴力が起きる。親に怒りを持つ子どもたちは親の弱点を狙って、そこを攻撃する。学齢主義にはまっている親の子どもは登校拒否という手段を選ぶし、性的な逸脱に嫌悪や恐怖を持つ親の娘たちはテレクラや売春に走る。自分の親に暴力をふるう代わりに他人の親を襲う「おやし狩り」というものもある。

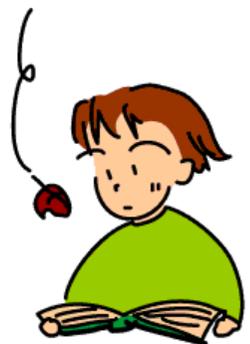
親との関係の中で自己評価が下がってしまい「力」の不足を感じているような子どもが、なげなしの力を確認するために、より弱い仲間に対して行う力の行使が「いじめ」である。「いじめ問題」とは親子問題である。

性の欲動は子どもの日常に秘密のポケットを作る。性欲動の否認・排除が食の欲動へと転換する。排除は拒食の形をとり、転換は過食という行動で表現される。「良い子」たちは、「病気」になることによって大人としての生活史の開始を遅延させ、家という人工子宮に留まりたがっている。

現代の日本が抱える最大の問題は少子化で、このまま進めば21世紀末までに日本の人口は半減する。10数年後には年金制度が破綻すると経済政策の専門家たちは心配する。

スウェーデンは、人口の定常状態を維持する合計特殊出生率2.1を維持している。母親の既婚率は下がっているが、生まれた乳児の母親の半数以上は未婚の母である。未婚といっても性的パートナーがいないわけではない。婚姻という制度を選択しないというだけの話である。産みたくて産む母は、どんな子であれその子を承認するであろう。その母のパートナーは(それが男性であれ、女性であれ)喜んで愛するものの夫、愛するものの子の父という役割を果たすであろう。未来の家族における父とは、このような母のパートナーのことである。未来の父が居るべき場所は、「伝統的な家族へ戻れ」と叫ぶ保守主義者の頭にある家族とは随分違ったものになるような気がする。

次回のテーマは、「心身の病と救い」9月11日(日)14時より黙想の家ログハウスです。参加費原則無料感謝献金。福岡教区報に案内を掲載しています。





教会学校のページ



7月23日(土)教会学校錬成会 子ども達の感想

2年 野田 あすみ

わかいしんぷさまが二人いました。すごくやさしかったです。おみどうでおいのりをしました。しゅにんしんぷさまから、天しをもらってうれしかったです。

イルカのショーがたのしかったです。水がかかったのが、つめたかったです。

あって、次にイルカのショーを見ました。

イルカがジャンプをするときに水がいっぱいかかりました。服がぬれて寒かったです。その後は、自由行動でした。ヒトデなどをさわるコーナーもあったのでさわってみたら、ヒトデはかたかったです。カブトガニは、とても重かったです。また今度も海の中道マリンワールドに行きたいです。



5年 城 龍彦

イルカのショーで水しぶきをうけたのがいやだった。カブトガニをさわったからうれしかった。

2年 平田 あやか

わたしは、アシカを見ました。アシカはすごく力があって、すごいアシカは元気がいっぱいだと思います。たのしかったです。また行きたいです。

5年 坂本 すず

古賀教会に着くと、アメリカの神父様に会いました。そこには神父様が3人いました。2人はスリランカ人で、1人はアメリカ人です。最後にあく手をしました。とってもやさしかったです。今度はそこでミサを受けてみたいです。

また、私は、教会の皆さんと海の中道マリンワールドに行きました。最初に貝の説明が



4年 平田 稜祐

楽しかった。スタンプラリーのけい品をもらえたからうれしかった。

イルカのショーのとき、水がたくさんかかったからいやだった。おかしがおいしかった。

6年 豊岡 香純

イルカのショーで水しぶきがかかって、楽しかったです。また、行きたいです。

古賀教会で外の神父さまとあく手をしました。また会いたいです。

5年 野田 宏人

イルカのショーを見て、いっぱい水にぬれて楽しかったです。スタンプの景品がもらえてうれしかったです。

古賀教会には神父様が3人いました。

4年 田中 けんたろう

イルカのショーを見て、水しぶきをあびたのが、楽しかった。

5年 宗 真理恵

今日、マリンワールドに行きました。たんけんビーチでナマコをさわりました。

アシカのショーを見ました。フクとアンダという名前でした。その後、イルカのショーがありました。楽しかったです。

スッキリかいけつがありました。おもしろかったです。その後、自由行動でした。くるくる同じ所をたくさん回りました。

たいくつでした。でも、楽しかったです。



今月の聖人

5日 聖ラウレンチオ・ユスチニアノ大司教

1381年-1455年

ユスチニアノは、イタリアのヴェネチアの貴族の家に生まれ、信仰深い母親に育てられた。ユスチニアノは、名誉や快樂に心を引かれたが、19歳のころ回心し、司祭となって神に生涯をささげたいと望んだ。そして司祭の伯父がいる聖ジョルジョ修道院に入って、勉学、祈り、苦行の生活をし、物乞いをする勤めも果たした。司祭になった後、1433年にカステロの司教に任命され、教区改革に力を尽くし、51年には、ヴェネチアの初代総大司教に任命された。ユスチニアノ自身は、生涯キリストに倣った貧しい生活をし、亡くなる時も「イエス・キリストが堅い木の十字架で死なれたのだから」と言って、堅いベッドの上で息を引き取った。



★敬老お祝い会★

日 時：9月11日(日)ミサ後
場 所：水巻教会 信徒会館
今年も敬老のお祝い会をします。お手伝いできる方は、ご協力ください。

★北九州地区親睦レクリエーション大会★

日 時：9月19日(月)
場 所：行橋 グランド

最近の二年は雨で中止になりましたが、今年も準備をしていますのでたくさんの方の参加を待っています。特に子どもたちの参加をお待ちします。

詳しいことは、教会のお知らせをお聞きください。

★特別寄付★

赤間地区の橋本様より色紙をいただきました。ありがとうございます。

★福岡教区信徒協 1日研修会★

日 時：9月23日(金) 午前10時～
場 所：カトリック大名町教会 4階
今年のテーマは「ナイスについて」です

教会が新しく生まれ変わるために、日本のカトリック教会は「ナイス」を開催して多くに信徒からの意見を聞き議論を深めました。その結果を基に、それ以後の教会のあり方を決めてきましたが、最近はその考え方を知らない人がたくさんいます。

昨年の教区研修会でも知らない人や十分に理解されていない人がたくさんいることが分かりました。今年はこの件についての著作もある「森司教」お出でいただき、詳しい解説と分かち合いを行います。

9月に入ると皆さんへお知らせをします。参加は役員でなくてもどなたでも自由です。多くの方の参加をお待ちします。

折尾地区

西山寿美枝さんの短歌

朝冷えの欄干に蜘蛛系かけて
小さき網のときどき光る
老人の誕生は意味深く
認知症の話次々と出て来て
色々なローカル線に乗りたくも
身になわねば独りおさむる
葉にはマザーテレサの写されて
軽く口づけす愛をください
着せ綿を想いて買ひし紫の
小菊の名前友は知らざり
枝々の先まで咲けるサルスベリ
夜のしじまに白く極まり
公園にて歌をうたえば鳩達が
腹を地につけきいてくれたり